自尊感情のレベルおよび安定性が攻撃性と抑うつにおよぼす影響
―傷つきやすさを媒介過程として―

田村　郁衣

自尊感情はこれまで比較的安定した特性として概念化され、自尊感情のレベル（高～低）に焦点を当て研究されてきたが、自尊感情のレベルといった単純な区別では、その役割を捉えるには不十分であることが指摘されている(Baumeister, 1993)。

本研究では、自尊感情を安定高群、不安定高群、安定低群、不安定低群の４群に分け、不安定な自尊感情をもつ人の特徴として傷つきやすさを取りあげ、尺度を作成し、４群において、傷つきやすさがどのように関連し、攻撃性と抑うつに影響を与えるかを検討した。

その結果、自尊感情の低い人においては、疎外場面や失望場面における傷つきやすさが敵意や怒りといった認知･情緒面における攻撃反応を促進することが明らかとなった。また、自尊感情が低くて安定している人においては、そのような場面での傷つきやすさが顕在的攻撃である言語的･身体的攻撃の発現を促進することが示された。このように、自尊感情の低い人に関しては、傷つきやすさを媒介して攻撃性を説明するモデルが有効であり、自尊感情の低い人においては、攻撃性におよぼす要因のひとつに傷つきやすさの影響が考えられる。

ＴＡＴにおける防衛機制コーディングシステム作成の試み

内藤　綾子

これまで、質問紙やロールシャッハ・テストなどによる防衛機制査定枠組みが数多く提案されてきたが、防衛機制の列挙的分類にとどまっており、何が自我に脅威を与えていて、そうした事態にどのように対処しているのかという構造的視点が欠けていた。これを補うためには、ＴＡＴの、「時間的経過の中での起承転結」や「内的なもの(Need)と外的なもの(Press)との相互関係」を反応に求めるという特質が有用であるため、ＴＡＴで防衛機制コーディングシステムを作成することとした。反応を整理する際には、物語内容・形式の両側面に注目し、防衛機制判定マニュアル（Cramer, P., 1991）を参考に、発達的視点からランク付けをした否認、投影、同一視、知性化を査定した。

まず、各被験者ごとに防衛機制のあり様について考察し、その上で全被験者を通してみると、その被験者にとって中心的な問題に対して防衛機制を多く用い、幼稚な防衛機制を用いる傾向が見られた。次に、図版ごとに防衛機制反応をまとめ、その図版に見られやすい防衛機制と防衛対象を考察した。絵に複数の人物が描かれている図版では、対人葛藤場面が増えるため、防衛機制が多く用いられると思われたが、実際には、自己の内面が表出しやすい無人図版で多く用いられた。これは、対象者が、自己の内面を表出することが苦手だったためではないかと思われる。